

# 文学用語の再検討\*

— 〈モチーフ〉と〈意図〉と〈テーマ〉 —

坂 本 肇

The Re-examination of Literary Terms  
“Motif”, “Intention” and “Theme”

By  
Hajime SAKAMOTO

The aim of the present paper is to re-examine the definitions of literary terms.

“Motif” seems to be often confused with “theme” and so on. But each term should be conceptually discriminated from others.

“Motif” is in my opinion a writer’s motive power for creation.

“Intention” seems to be also identified with “theme”, but the former is a writer’s aim and the latter is nothing but the “reality” which is totally described in his work.

## 1. はじめに

本稿の目的は、文学用語の概念規定について再検討を試みようとするものである。

文学研究者にとって、作品研究の目的は、その作品とそれを生んだ時代・社会との相関関係を発見することによって、作品の現代的意義を明らかにすることにあるが、作品にそくしていえば、その作品世界に〈現実〉がどのようなものとしてとらえられているかを科学的に明らかにすることにある。

科学的とは、『広辞苑』（岩波書店、昭和42年 第2版）によれば、「事実そのものによって裏づけられ、論理的認識によって媒介されているさま」とあるが、作品研究においては、研究対象である一つの文学作品が、作者というひとりの人間によってモチーフされ、ある一定の意図のもとに、何らかのテーマ（主題）をもつ作品が創りだされるという虚構の弁証法的な創造過程とその結果を、事実こそくして理論的に分析し、かつ論証することである。したがって、作品に何が描かれているか、いいかえれば、作品のテーマは何か、を作品そのものから客観的に剔抉することは、作品研究における方法論上のアルファでありオメガである。

\* 水産大学校研究業績 第660号、1972年1月24日 受理。

Contribution from the Shimonoseki University of Fisheries, No. 660.

Received Jan. 24, 1972.

このような周知の事柄に属するように思われることを、ここでことあげるのは、テーマという文学用語によって、作者のモチーフや意図を、あるいは作者の思想を、または作品の思想性や問題性を、論じていたりまたはこれらのいくつかを混同して論じていたりする作品研究が、一般に少なくないように見受けられるからである。このような研究は、一見いかにすぐれたものであっても、作品それ自体をあるがままに評価しているとはいえない。はなはだしいのは、作者のモチーフや意図を付度するあまり、作品に（作者とはいちおう独立して）客観的にとらえられるものとしてあるテーマを発見しないで、作者のモチーフや意図をそのまま作品のテーマだとする研究さえもがまま存するかに見える。だからといって、私は作者のモチーフや意図を探ることの意義を否定しているのではない。モチーフや意図がテーマとそれぞれに密接不可分な連関性をもっていることはいうまでもないが、小説などの主題というのは、書きだす前も、書いている間も、実は作者にはよくわかっていないことが多いのである。それについては後に例をあげて検討してみたい。

モチーフ・意図・テーマなどがしばしば混同されて使われるのは、内容の性質上それなりの理由もあるが、概念としてはあくまで厳密に区別されなければならない。作品研究においての方法論上の混乱は、文学用語としてのモチーフ・意図・テーマなどの概念規定が不明確であることからひきおこされているので、それぞれの概念規定を明確にしておく必要がある。

ところがこれまでの文学辞典などに定義されているものは、文学用語としては誤っているか、あるいはあいまいな規定がおどろくほど多いのである。したがって、本稿では、現在比較的容易に利用しうるわが国の文学辞典の多くを参照することによって、モチーフ・意図・テーマなどの概念規定を再検討することにした。

なお本稿に引用した辞典は次のとおりである。

新村出編『広辞苑』（岩波書店、昭和30年）

新村出編『広辞苑』（岩波書店、昭和42年 第2版）

世界文芸辞典編集部編『新訂世界文芸辞典西洋篇』（東京堂出版、昭和34年）

福原麟太郎編『文学要語辞典』（研究社レファレンス・ブックス、昭和35年）

斎藤勇編『英米文学辞典増訂新版』（研究社、昭和36年）

阿部知二・野間宏共編『現代文芸用語事典』（河出書房新社、昭和42年）

福田陸太郎・永松定孝共編『文学用語解説辞典』（東京堂出版、昭和46年）

本多顕彰著「文芸用語の解説」（『現代用語の基礎知識1972年拡大版』、自由国民社、昭和46年）

## 2. 〈モチーフ〉について

モチーフという用語はよく使われるが、実際は概念規定が明確でなく、作品の主題と混同されているだけでなく、題材なども混同されている。たとえば研究社の『文学要語辞典』によると、モチーフの定義は次のようになっている。

《芸術作品の主題・中心観念・題材などをいう。Chaucer の *The Legend of Good Women* の motif は貞節なる愛である。その物語全体がこのテーマを説明しているといえる。もちろん motif がこのように単一なものばかりとは限らない。いくつかの motif が見られる文学作品もある。》(ibid., p.195)

これは訳のわからない定義である。他の文学辞典も似たりよったりな説明が多いが、モチーフを「芸術作品の主題・中心観念・題材などをいう」とすれば、主題や中心観念や題材などの概念との相互的な連関性が明らかにされないかぎり、モチーフは主題でもあり、中心観念でもあり、題材でもあることになって、モチーフとしての概念は無差別的に拡大する。

モチーフは、主題や中心観念や題材などとは違ったそれ自身の概念を規定されるべきである。また主題や題材はそれぞれが別個に概念規定を与えられるべきであるのに、同辞典はそれを無差別的に混同している。

「Chaucer の *The Legend of Good Women* の motif は貞節なる愛である」というときの motif は主題のことに他ならず、モチーフとテーマを同一視しているが、文学用語としてのテーマ（主題）と中心観念については、後に項を改めて検討するので、ここではふれない。

モチーフが題材をいうとすれば、「貞節なる愛」が *The Legend of Good Women* の題材であるということになりかねないが、それは変である。題材とは作品（の主題）を構成する材料のことで、表現の手段としての一定の事物（人物の行動や感情、自然物の風景、事件など）をさす。作品にとりあげられる素材が題材である。題材はその性質上しばしば作品の内容と混同されがちであるが、それ自体としては「本来の芸術品に属していない自然的所与である。」（阿部知二・野間宏共編『現代文芸用語事典』、河出書房新社、昭和42年、p. 170）と考えるのが概念規定としては正確である。題材は、作者のモチーフや意図ならびに作品の主題とは密接不可分なものであるが、概念としては厳密に区別すべきである。

それではモチーフとは何か。『英米文学辞典』（研究社）によると、

《文学についていえば、作品中にしばしば反復される主題（theme）をいう。抒情詩に多い ‘carpe diem’ motif などその一例。》（*ibid.*, p. 717）

とあり、モチーフの概念は「作品中にしばしば反復される主題」と限定されている。しかし「反復される主題」とは、音楽用語として使われるモチーフの誤用である。音楽用語のモチーフは、「音楽の意味として性格のはっきりした纏まりを示している最小の単位」（山根銀二編『音楽』、岩波小辞典、1955年、p. 125）のことであり、楽節の基本となるモチーフがしばしば反復されることによって、曲全体の主題が展開・構成されるのである。したがってモチーフは「動機」と訳されることはあるが、作品の主題ではない。

もっとも、『英米文学辞典』はその定義のあとに次のようなただし書きをそえている。

《作品のもつ概念的な主題を表わすときには theme の語が用いられることが多く、作品の根底に流れる原型的（archtypal）な、または情緒的な主題を表わすのには motif の語が用られる場合が多いようである。》（*ibid.*, p. 717）

作品の「概念的な主題」に theme の語を、「原型的な、または情緒的な主題」に motif の語が用いられるというのは、テーマとモチーフの混同であり、概念規定のあいまいさを示すものである。主題については後にふれるので、ここでは立ち入らない。

新しく出版された『文学用語解説辞典』（東京堂出版）でも、モチーフが例によって中心観念、主題、題材などと混同されていて、モチーフの概念は非常にあいまいである。

《中心観念、主題。音楽や文学作品のテーマ、題材のこと。一つの作品は単一のモチーフをもつものだけではなく、いくつかのモチーフが見られるものもある。時にはモチーフは「動機」の意味になる。つまり、作者が素材からあるテーマをつかんだとき、それを表現しようという意欲に駆られる。その創作のきっかけをなす動機を指すことがある。》（*ibid.*, p. 234）

時にはモチーフは「動機」の意味になることがあると、同辞典は説明しているが、モチーフは「動機」の意味にのみ解釈するのがよい。主題や題材は別に概念規定されるべきである。ちなみにいえば、わが国の代表的な辞書の一つである『広辞苑』によると、モチーフの項は、「(1) 絵画、彫刻、小説などにおいて表現の動機となった中心思想。……(2) 音楽形式を構成する最小単位。……」となっている。

モチーフは、ふつう動機と訳されるように、作品を書くときに、これを書こうと作者が思うそのきっかけを与える原因となるものをいう。作者はそのモチーフに動かされて作品を創り出すのである。

『現代用語の基礎知識』（自由国民社、1972年拡大版）のなかにある本多顕彰著「文芸用語の解説」によると、モチーフは次のように定義されている。

《芸術品を創作しようとする意欲の原動力となる思想。またはその思想がきざみこまれている素材。したがって、動機と訳す。》(ibid.,p.665)

モチーフは、作者がある事物に触発されて、それを素材として何かを書こうと思うその創作のきっかけをなす動機をいうので、モチーフを「芸術品を創作しようとする意欲の原動力」と規定するのはよいが、「原動力となる思想」というと、作者の思想に重点が移りすぎるようである。もちろん、ある事物に触発されて創作の意欲を起こすか起こさないか（起こされるか起こされないか）は、作者の物の見方（思想）によることはいまでもないが、その作品を書こうとする作者のモチーフそのものと、作者の基本的な思想とは、やはり区別しておくべきであろう。

この「文芸用語の解説」にある後半の、「思想がきざみこまれている素材」というのは意味不明確である。素材は、「広義には芸術家の想像活動によって形成されるべきすべての経験的所与をいう」（『現代文芸用語事典』,p.170）ことがないでもないが、文学用語の概念規定としては拡大解釈すべきではない。

このようにモチーフという用語一つをとりあげても、多くの辞典が、それをテーマ、中心観念、題材・素材、思想などという概念と無原則的に混同しているのである。

モチーフとは何かについて、明確な説明をしているのは、わずかに阿部知二・野間宏共編の『現代文芸用語事典』（河出書房新社）くらいのものである。少し長くなるが、全文を引用しておく。

《創作において、まず素材があり、それがテーマによって一定のプロットに組みあがり作品が成立する。というふうにいってしまうならば簡単であるが、もちろんこんな公式だけで文学作品がうまれるとはいえない。作者が素材からテーマをつかんだときに、表現への創造的意欲が彼をとらえる。作者はその内部衝動に刺戟されて、作品形成をすすめる、そこに自己を賭ける。その内的要求、すなわち作者と作品をつなぐヘソの緒ともいえるもの、それがモチーフである。これは、創作の舞台裏にあって消えるものではなく、どのような素材であれ創作は作者の自己表現だという意味において作品に実現される。それが文学である。もちろん、モチーフがなくても構成力、筆力があれば、素材とテーマを生かして小説は書ける。高見順が「ヘソなし小説」ということばで非難したのは、その種の小説は文学ではないという意味である。もっとも、自分ではモチーフがありあまるつもりでも、下手は下手なり、ということはある。》(pp.272~273)

このようにモチーフを「作者と作品をつなぐヘソの緒」であるとするたとえば、創作過程における文学のダイナミックな（飛躍）を暗示しえて妙である。

### 3. 〈意図〉について

意図という用語は、モチーフに比べて意味がはっきりしているのので、概念上の混乱は少ないようである。意図とは、文字通り目的のことであり、作者が描こうと目がけるそのおもわくをいう。

注意しなければならないのは、意図は主題とは別のものであるということである。作者の狙いである意図は、そのまま作品に実現されるとはかぎらない。意図は作品のなかに潜んでいるばあいもあるし、果せなかったばあいもある。その意味では、作者の意図を作品から探ろうとすることは徒勞に近い。作者の意図ど

おりにならなくても傑作ができることはありうるし、また逆に意図だおれの駄作になることもありうるように、作者の意図は、文学創造の弁証法的な過程から見れば、作品の主題とは違ったものである。

したがって、作者の意図から作品の主題を明らかにしようとするのは、方法論としてまちがっているといわなければならない。《岩鼻や ここにもひとり 月の客》という句における去来の意図を真向から否定した芭蕉の虚構論（向井去来著、額原退蔵校訂『去来抄・三冊子・旅寝論』、岩波文庫、p.18参照）を想起すれば、意図と主題の相関関係はおのずと明確になるであろう。

小説における創作の過程を一般的にいえば、ある何らかの事物に触発されて、これだ、これを書こうというモチーフが作者にうまれる。一定の意図のもとに、題材がえらばれ、作品が構想される。そして一つの作品が創りだされる。ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）は、自作『ダロウェイ夫人』（*Mrs. Dalloway*）の成立事情について、「意図（the idea）は牡蠣や蝸牛がそうするように、自分で家を分泌しはじめた」（Modern Library 版の Author's Introduction。研究社英米文学業書 *Mrs. Dalloway*、p. XIV.）といている。彼女によれば、『ダロウェイ夫人』のなかで、後にヒロインの分身として意図されたセプティマスは、初稿では存在しなかったし、本来はダロウェイ夫人が自殺するか、または宴会の果てに死ぬかするはずであったという。そこに創作の秘密を解き明かす一つの鍵がある。作品は、作者のモチーフや最初の意図を超えるのである。

アンチ・ロマン派のアラン・ロブ＝グリエも、その小説論のなかで、一行一行を書きあげていくことによって、つまり〈形式〉を書きあげていくことによって、〈内容〉を分泌していくのが創作であると述べている。彼によれば、「小説の文章（エクリチュール）は、年代紀や証言や科学上の報告などのように、情報を伝達することを目的とせず、みずから現実を形成する。みずからがなにを求めているかを知らず、なにをいふべきかについて無知である。それは創出（アンヴァンション）、世界と人間との創出、不断の創出であり、間断ない再検討である。」（平岡篤頼訳『新しい小説のために』、新潮社、1967年、p.181）という。ことばをかえていえば、小説の創造とは、意図の伝達ではなく意味の探求そして意味の創造なのである。

虚構としての文学がそういうものである以上、われわれは、作品研究においても、作者が何を描こうとしたか（モチーフや意図）を探るのではなく、そこに何が描かれているか、すなわちみずから形成されている〈現実〉（それがとりもなおさず作品の主題である）を作品にそくしてトータルに読みとらなければならない。

## 5. 〈テーマ〉について

モチーフや意図が誤ってテーマと混同されていることは、すでに見てきた。それではテーマは一般にどのような定義されているか。岩波書店の『広辞苑』（昭和30年 第1版）によって、まずテーマの項をひくと、「主題」とだけ書かれている。それで次に主題の項をひくと、

《(1)主要な題目。(2)作者の描こうとする主要題材、即ち作品の中心となる思想内容。テーマ。(3)楽曲の全部または一部の基礎となり、その旋律的・和声的・律動的発展が楽曲を多様に展開させるもの。テーマ。》

これが主題（テーマ）についてのわが国での一般的な常識的な考え方といってよい。(1)は論文などの題目のことであり、(3)は音楽についての用語なので、ここでは(2)の項目だけが文学において使われる主題に該当するが、この『広辞苑旧版』の説明は、すでに検討してきたように、誤りをふくんでいる。「作者の描こうとする」主観的な狙いが、そのまま作品に形づくられ定着されるとは限らないことは、くり返し述べた。「主要題材」という語も適切ではない。題材自身としては「本来の芸術品に属していない自然的所与」であって、主題ではないし、主題と直接の関係はない。それにまた、「作者の描こうとする主要題材」と「作品の中心

となる思想内容」とを「即ち」ということばで直結させる『広辞苑』の説明は、概念の混同もしくはすりかえである。

昭和42年に改訂された第2版の『広辞苑』では、主題についての(2)の項目は、「芸術作品などの中心となる思想内容。テーマ。」とだけになっていて、「作者の描こうとする主要題材」という説明の箇所は削除されている。旧版にくらべれば、主題を意図や題材と混同していたのが削除されただけに、よくなっているが、主題の説明が「中心となる思想内容」だけでは、主題と思想の概念上の関連性が明確にされないかぎり、主題の意味はいぜんとしてあいまいである。

それでは主題、すなわちテーマとは何か。文学研究にとって、不可欠な概念規定なので、煩をいとわず文学辞典を参照してみよう。東京堂出版の『新訂世界文芸辞典—西洋篇—』によると、テーマは次のように定義されている。

《主題。作者の描かんとする主要目的のこと。たとえば『ハムレット』のテーマは復讐であり、『椿姫』のテーマは恋愛であるというように、作品の筋、情景、人物、題材ではなく、それらのすべてを駆使して読者に訴えようとする内容である。》(ibid., p.394)

この定義は論外である。「作者の描かんとする主要目的」とは作者の意図の説明に他ならない。

作品に備わっているテーマは、実際に作者がはじめから意識的に目的としていたかどうかということとは別である。もちろん作者は作品を構想化するとき、何らかのテーマを立てているわけであるが、それはあくまで仮設的なテーマにすぎず、その成否は定かではない。《作家が作品をつくる場合の手順として、テーマは最も重要で、作者の思想をプロットに盛りこむためには、テーマが確立されていなければならない。》と『文学用語解説辞典』は述べているが(ibid., p.166)、それは仮設としてのテーマのことであって、作品におけるテーマとは一線を画さなければならない。

《一つの文学作品の根本的意図、本質的概念、支配的態度、全体的意義などをいう。themeによる作品の統一的効果は特に近代の小説においてすこぶる重大である。とくに作者の抽象的思想が象徴的に表出されている物語においてそうである。》

これは研究社の『文学要語辞典』のテーマに関する定義であるが、意味がよくわからない。東京堂の『文学用語解説辞典』も、テーマを《文学作品における根本的意図、本質的概念、全体的意義。》というように、ほぼ同じように説明しているが、どちらも「根本的」とか「本質的」とか、「全体的」とかの形容詞をつけて説明の内容の貧弱さをカバーしているようである。「文学作品の根本的意図」とか「文学作品における根本的意図」といわれるときの意図は、作者の意図とどのように違っているのか、また違ってないのか、明確にされるべきである。

テーマを「本質的概念」とするのもおかしい。概念は「中心観念」と同じようであるが、われわれは作品のテーマを必要に応じて概念化するのである。テーマは作品のなかに客観的にとらえられるものとしてあるが、概念そのものではない。また、そのテーマからわれわれとの関わりにおいてどのような意義があるかを発見するのであって、テーマそのものは意義ではない。

テーマとは何かについて、わが国の文学辞典のなかで比較的まともな説明をしているのは、モチーフの項でも引用した『現代文芸用語辞典』である。それによると、テーマは次のように概念規定されている。

《芸術作品によって表現しようとする中心的な意味内容、中心的問題、思想内容など。シェークスピア悲劇の主要テーマは人間の性格に発する運命の問題であるというごとくである。テーマは素材をともなって提示される。よくいわれるように素材なしにテーマを決めるわけにはいかないが、もちろん素材がただちに主

題ではない。作家の構想力および思想が一定の方向で把握したものを、素材によって具体化しつつ展開する。モチーフやプロットも、テーマを作りあげるうえに有効な役割をうけもつ。モチーフとテーマはしばしば混同されがちな用語であるが、内在的な発想としてモチーフされたものが、素材や人物やプロットによって総合的に顕在化されたもの、すなわち、モチーフに対する作者の態度を決定するイデーがテーマである。「テーマ小説」などというばあいは、一定の明確なテーマが提示され、作品のすべての要素がそこに集中されるように組み立てられた作品のことである。……》(ibid., pp. 189-190)

この『現代文芸用語事典』も他の辞典と同じように、テーマをア・プリオリなものとしてとらえているが、文学作品は、ロブ＝グリエのいうようにみずから形成される現実である。テーマは「内在的な発想としてモチーフされたもの」が、その作者の主観的な意図のいかんにかかわらず、作品に具体的に「顕在化されたもの」である。「モチーフに対する作者の態度を決定するイデー(思想のことか)がテーマである」というのは、前文と矛盾している。モチーフに対して作者の態度を決定するのはもちろんイデーであるが、それによって作られる作品、したがって作品のテーマは概念としては区別されるべきである。

テーマを「中心的な意味内容」と規定するのは、作品のテーマが作品にみずから形成されている〈現実〉であるとすれば、いちおうよいとしても、「中心的問題」や「思想内容」とまでいっしょにするのは、定義としては厳密さに欠ける。もちろんそれらは切り離せないが、概念規定を厳密にしていえば、テーマと思想は区別されるべきである。いま具体的に作品から例証するゆとりはないが、思想(イデー)も作者のもっている基本的な思想と作品がもっている思想とは区別して考えた方がよいかもしれない。テーマと「問題」も同一ではない。作品のテーマは変らないが、作品の問題性は時代・社会によって変わってくるのである。

作品のテーマは、問題性や思想性を内包し、かつまたそれらに支えられながら、作品の隅から隅までトータルに描かれている〈現実〉なのである。ただ、それを必要上から便宜的に概念化して抽出することはすでに述べた。

## 5. おわりに

以上の考察から結論的にいえば、モチーフ・意図・テーマなどに関する用語の概念規定についていう限りわが国の文学辞典のなかでは『現代文芸用語辞典』の説明が比較的信頼できる。

なお、テーマとは何かをより明確にするためには、思想(作者の思想、作品の思想、作中人物の思想など)や問題や意義などの概念規定をするとともに、それらの相関関係を具体的に検討しなければならないが、それについては別の機会にゆずる。